

第一次上海事変 川島芳子を使った関東軍の謀略

関口宏、保阪正康のもう一度！ 近現代史(3)

関口 宏, 保阪 正康

プロフィール

BS-TBSの人気番組の書籍化第二弾！ 新興国・日本が経済力と軍事力に自信を深め、欧米列強に伍する新たな一等国として成り上がろうとした、野望の時代、大正～昭和11年初頭までを描く書籍、『[関口宏・保阪正康のもう一度！ 近現代史戦争の時代へ](#)』から注目の章をピックアップしてお届けします。

第一次上海事変 川島芳子を使った関東軍の謀略

昭和7（1932）年1月28日

上海で起こった抗日運動をきっかけに、日本軍が出兵し中国軍と激突する。しかしこの事件の背景には、「東洋の Mata Hari」と言われた川島芳子が暗躍する謀略があった。

関口 満州で関東軍が戦線を拡大している最中の昭和7年1月18日、抗日運動の拠点のひとつである三友実業社の前で、日本人僧侶5人が数十人の中国人集団に襲われて1人が死亡、4人が重軽傷を負います。



2日後、日本人居留民30人が武装してこの三友実業社を襲撃、このときは日中双方に死者が出ました。これを受けて日本政府は加害者の処罰や慰謝料、謝罪などを中国側に要求し、さらに兵士と軍艦を派遣します。このときは陸軍ではなく、海軍の陸戦隊が出動しました。

保阪 海軍としても中国戦線、満州でなんらかの働きをしたいという考えがあったのではないのでしょうか。

「戦争」と「事変」を使い分ける

関口 この事件をきっかけに1月28日、上海で日本軍と中国軍が激突する上海事変に発展します。この事変という言葉の意味はどのようなことなのでしょうか。



保阪 戦争と区別しているんです。宣戦布告をして国家間に戦闘状態が発生するのが戦争で、そうになると国際法の決まりがあり、戦時予算や、徴兵など戦争のための国策を策定する必要も出てきます。反戦的な言論・行為を取り締まり、罰することができるようになる。そういった法的なことを含めて、軍部は「戦争」と「事変」を使い分ける計算をしていたと思います。

また日本の場合、天皇が戦争という言葉に非常に恐れ、神経質になっていたと言えらると思います。

関口 田中隆吉少将は戦後の東京裁判で、「満州を独立させるために上海でことを起こし、列強の目をそらしてほしい」と板垣征四郎大佐から言われ、工作資金 2 万円、現在の価値で 1600 万円相当をわたされて日中の軍事衝突を起こすよう依頼されたと証言しています。

保阪 関東軍には、そういう意図はあったと思います。

とはいえ、田中は東京裁判で検察側の証人となっているんです。日本の軍隊がいかにもひどいことをしたか、自分自身のことを含めて検察側の主張に沿う形で証言しています。この証言を客観的史実として扱ってよいかどうか、私は断定できません。

関口 板垣から依頼を受けた田中は、川島芳子を使ったんですね。

溥儀の妻の婉容を天津の租界から言葉巧みに連れ出した川島芳子が、このときにも動いている。田中は川島芳子に、1 万円をわたしたそうです。板垣から預かった 2 万円の半分を託した。川島はこのカネをもって、三友実業社に働きかけて日本人襲撃事件を起こさせたというんです。三友は抗日義勇軍を持っていましたので、使えると思ったのでしょう。

保阪 そこが田中証言のひとつのポイントです。おそらく、大きな流れとしては事実でしょうが、はたしてすべてが本当なんだろうかとクビを傾げるような部分もあります。

東西の文化が混じりあう流行の最先端都市

関口 しかし、その結果として上海事変が起きたことは事実ですね。

当時の上海という街は、東西の文化が混じりあう流行の最先端都市で、外国人居留地を中心に 2 万 5000 人もの日本人が住んでいたと言われていています。当時の上海を歌った「上海リル」なんて歌を聴いてみても、この当時としては非常に洒落ていますね。すこしジャズっぽい要素が入っているのかな。



保阪 この当時の上海という街は、日本では想像もできないほど様々な文化が混じり合っって独特の雰囲気醸し出していたといますね。